

大アジア主義 (1~4)

神戸高女にて 戴天仇氏通訳

(1) 文化の発祥地

諸君、本日諸君の最も熱誠なる歓迎に応じて自分は誠に感謝に堪えぬのであります、今日皆さんに申上げる所の問題は即ち大亜細亜主義であります。

惟うに我亜細亜というのは即ち世界文化の発祥地である、世界最初の文化は即ち亜細亜から発生したのであります(拍手)今日欧羅巴の一番古い文化の国である所の希臘の文化にしても、又羅馬の文化にしましても、夫等の文化は総て亜細亜の文化から伝えられたのであります、我亜細亜の文化というものは一番古い時から数千年前から、政治の文化にしましても、道徳的文化にしても、又宗教的文化、工業的文化、総て世界のあらゆる文化というものは、悉く亜細亜の文化から系統を引いて居るのであります、近来に至りまして...最近の数百年になりまして亜細亜の各民族が段々衰頹しまして、そして欧羅巴の各民族が段々強盛になりました、その結果、彼等は支那に向って、—彼等の力を以て亜細亜に圧迫を加えました、そうして亜細亜における各民族的国家というものは段々彼等に圧迫され、亡ぼされ、殆ど今から三四十年前までは亜細亜において一の独立したる国家というものはなくなつたのであります、大勢茲に至って、即ち機運が非常に衰頹し、亜細亜の運命が衰頹の極にあつて、そしてこの機運がこの三十年前に至って愈々復興の機運になつたのであります。

この三十年前において亜細亜の復興機運が発生したという事実はどういうことから認められるかという、即ち三十年前において日本国が各国との間に存在した所の不平等条約、平等ならざる条約の改正を得たという時から、亜細亜民族というものが始めて地位を得たのであります(拍手)この日本の条約改正によりまして、日本が独立したる民族的国家となりましたけれども、其外の亜細亜における各民族国家というものは、総て独立したる国家でなく、総て欧米各国の植民地の境遇に居るのであります、我中国であつても、又印度波斯、亜刺比亜、その他のあらゆる亜細亜の民族で国家というは総てまだ植民地という境遇に居るのであります、そう考えるというと日本という独立したる民族的国家の建設せられ

た所以は、即ちお国の国民が努力して、この不平等なる条約の撤廃、廃止それから得たのでありまして、その後段々亜細亜の各民族の国家に亘りまして、亜細亜の独立運動というものが、段々その機運が熟して来たのであります(拍手)

三十年前におきまして亜細亜の人間は、欧羅巴の學術の発達を見又欧米各国の殖産興業の発達を見、彼等の文化の隆盛を見、又武力の強盛を見ても、逆も我亜細亜各民族が歐洲人種と同じような発達を致すということが出来ないという観念を持ったのです、これが即ち三十年前における亜細亜民族の考えである、処で日本の条約改正によって亜細亜の民族は始めて欧羅巴の圧迫から遁れることが出来るという信念を持ったのであります、けれども尚之を全亜細亜民族に伝えるだけの力を持たず、それから十年たつて日露戦争が始まり、日本が欧羅巴における最も強盛なる国と、戦つて勝つたという事実によって、亜細亜の民族が欧羅巴の最も強盛なる国よりも強い又亜細亜民族が欧羅巴よりも発達し得るという信念を全亜細亜民族に伝えたのであります(拍手)

自分の見分する所知る所を之から諸君に申し上げます日露戦争当時自分は仏蘭西の巴里に居りました丁度その時日本の艦隊が日本海において露西亞の艦隊を撃破したという報が巴里に伝わった、それから数日後に自分は巴里を去つて蘇士の運河を経て帰国の途に就いたのであります、そうして蘇士の運河を通過する時、亜刺比亞の士人—蘇士の運河の士民が大分船の中に入って来て、自分の顔が黄色い黄色民族であるのを見て、自分に「あなたは日本人であるか」とききましたが、そうじゃない自分は支那の人である日本人でないということを答えて、そうしてどういう事情であるかと聴いたら、その人達が『我々は今非常に悦ばしいことを知つた、この二三ヶ月の中に、極最近の中に東の方から負傷した露西亞の軍隊が船に乗つて、この蘇士の運河を通過して欧羅巴に運送されるということを知つた、是は即ち亜細亜の東方に在る国が欧羅巴の国家と戦つて勝つたということの証明である、我々は、この亜細亜の西における我々は、亜細亜の東方の国家が欧羅巴の国家に勝つたという事実を知つて、我々は恰も自分の国が戦争に勝つたということと同じように悦ばしく思つて居る』というのであります(拍手)

彼等は亜細亜の西の民族である、亜細亜の西における亜細亜民族は一番欧羅巴に接近して居つて、一番欧羅巴の国家の圧迫を受けつつある、故に彼等は、この亜細亜の国家が欧羅巴の国家に勝つたという事実を知りまして、亜細亜の東の民族よりも、国民よりも非常に悦んだのである、その時から始めて埃及の民族が独立、埃及国の独立運動というものが始まつた、それから亜刺比亞民族も、波斯の民族も、土耳其も、又亜富汗尼斯坦も、印度においても、印度の民族においても総てその時から初めて独立運動というものが盛んになつたのであります(拍手)

(2) 王道の文化

日本が露西亞と戦つて勝つたという事実は、即ち全亜細亜民族の独立運動の一番始りである(拍手)それ以来二十年間におきまして、この希望、運動が益々盛んになりまして、今

日にあっては埃及の独立運動も成功し、又土耳其の独立も完全に出来上り、波斯の独立も、又阿富汗ニ斯坦の独立も成功し、そして印度の独立運動も益々盛んになる次第であります、是等の独立運動、独立思想というのが亜細亜の各民族に起りまして、そして西方の亜細亜民族は総て此独立運動の爲めに結合し、非常に大なる團結運動に着手しつつある、けれども唯亜細亜の東におきまして、日本と我国とのこの二国の結合、連繫というのが未だ出来ていないのであります、斯ういう運動、総てこの亜細亜の民族が歐洲民族に対抗して亜細亜民族の復興を關るのであるということは、歐米の民族が非常に明白に觀て居ります

この亜細亜民族が眼を醒したということ、歐米人がどう觀て居るかということ、この最近米国の学者が一の書物を作りました、その書物にどういふことを論じてあるかということ、即ちこの亜細亜民族の覺醒ということ論じてある、彼等がこの亜細亜民族の覺醒ということとをどう觀て居るかということ、彼等は亜細亜民族の覺醒というのは即ち亜細亜民族が世界の文化に対する謀叛であるということです。この米国の学者のストータという人が作ったこの書物の名は即ち「文化の謀叛」という名であります、即ち彼等が亜細亜民族の覺醒したという事實を觀て、是は世界の文化の一の危険であると論じてあるのであります、この書物は出版されてから僅の日数を以て数十版を重ね、更に各国語に翻訳さし、歐羅巴の人も、亜米利加の人もこの本に論じてあることを殆どバイブルに書いてある事のように非常に尊重して居る次第であります(拍手)この書物に論ぜられた亜細亜の覺醒ということも矢張り日露戦争が始まりであると論じてある。そしてこの亜細亜民族の覺醒ということの世界に対する威嚇であり世界の文化に対する不穩であると彼等は觀て居る、即ち彼等は歐米民族だけ世界の文化に浴せらるるこの権利がある、亜細亜民族というものとは決して世界の文化に浴せられる権利を持っていないと彼等は觀て居り、信じて居るのであります(拍手)

歐洲民族の考えでは、彼等は世界文化というのは単に彼等が持つて居る文化—彼等の文化というのが即ち一番高尚な文化であると思つて居る、成程此數百年來歐羅巴の文化は非常に發達しました、彼等の文化は我東洋の文化より進んでいた、東洋の文化はこの四百年において確に歐洲文化に及ばないけれども、彼等の文化というのは何であるかということ、即ち唯物質的文化であり、又武備武力によつて現れる所の文化である(拍手)即ち亜細亜の昔の言葉を以て評すると、歐洲の文化というのは霸道を中心とする文化でありまして、我亜細亜文化とゆうのは王道であります、王道を中心とする文化であります、彼等は単に彼等の國を以て我亜細亜を圧迫し、亜細亜民族を酷使する道具である、故に近來歐洲の學者で東洋の文化というのは道德的で、道德的文化に至つては、彼等よりも歐洲の文化よりも進んで居るということを段々認めて來たのであります、一番著しい事實というのは、即ち近來歐洲の文化というものが發達して以來世界的道德、國家的道德というものが非常に衰頹して來ました、そして昔この亜細亜の文化が非常に發達した時代では國家的道德が非常に進んでいたのであります今から二千年前から五百年前までの間というのは即ち我國の一番強盛な時代である、世界において二千年前から五百年前までの間の支那というのは世界における最も強盛なる國であり、第一の國である、今日の英國、又米國を以て較べても尚我國のその時代における世界的地位に及ばないのである(拍手)その時に亜細亜の南、又

亜細亜の東、又亜細亜の西、阿富汗ニ斯坦辺まであらゆる邦国、又あらゆる大陸的国家、民族が総て我国に来朝した、我国を祖国と思ひ、喜んで我国の属国となつていましたけれども、此等の属国に対して何をしました、又之等の属国、領土を得ましたのは、果して海軍の力を用いて征服したのであるか、或は陸軍の力を用いて征服したのであるか、決してそうでない、単に我国の文化に浴せられまして悦んで心服して我国に来朝しただけであります

この事實は今日になりましても尚はつきり証明し得る証拠があるのであります、亜細亜の西藏の西に二つの国がある、極く小さい国である、一は即ちブータンであり、即ち一はネパールでありまして、この二つの小さい国の一つのネパールは小さい国ではあるけれどもその民族というのは非常に強い民族である、今日英国の印度に於て用いて居る軍隊の一番最も強いコーカストという軍隊は即ちネパールの民族を用いたのであります、英国はネパールという国に対して非常に尊敬し、出来るだけネパールに尊敬を払ひました、そしてあらゆる工夫をして漸くネパールへ一人の政治を研究する人を寄越すことが出来た、この英国があらゆる礼口を尽し、そしてあらゆる方法を以てネパールに厚意を表した所には即ちネパール民族が非常に強い民族であり、英国がこのネパール民族を、コーカスト民族を利用して、それを用いて、これを軍隊にして、この印度の鎮圧に使うという目的を持って居るからである、英国が印度を滅亡したのには既に非常に長い時間がたつて居るけれども、このネパールという国は英国に対して今日尚独立の態度を以て英国に対し、決して英国を自分の上国、祖国であると思つていない、そういうことを感じていない

我国は非常に弱くなつてから既に数百年たつて居る、けれどもこのネパールという国は今日になつても、この最も国力の弱い我国に対しては従来通り我国を上国と思ひ、又我国を彼等の祖国であると観て居るのであります、そして民国元年までこのネパールの国は依然として祖国の礼を以て我国に来朝した事實があつたのであります(拍手)その事實を見れば是は実に最も奇怪なる事實であるとするのであります、この一の事實を觀れば即ち歐洲文化と東洋文化の比較というのがこの事實によって非常に明白となり得るのである、我国は衰頹して以来既に五百年たつたこの五百年も衰頹した我国を尚ネパールは祖国と思ひ、上国と認めて居る一方英国は今日世界中に於ける最も強盛な国であるけれども、ネパールという国は如何に英国が強くてもまだ彼は自分の祖国であるということを認めていない、この一つの事實は即ち東洋の民族は、この東洋の文化、この東洋の王道により文化に信頼を持って居るが、歐洲の覇道を中心とする文化に対しては決して信頼して居らぬのである(拍手)

(3) 日本と土耳其

大亜細亜問題というのは何ういふ問題であるかといふと、即ち東洋文化と西洋文化との比較問題である、即ち東洋文化と西洋文化との衝突する問題である、この東洋の文化は道德仁義を中心とする文化でありまして、西洋の文化というのは即ち武力、錢砲を中心とする文化である、それでこの道德仁義を中心とする文化の感化力というものほどだけあるかといふことは、即ち五百年間衰頹して来た所の我国に対して尚ネパールという国が今日

になっても我国を祖国であると認めるという一の事実が即ち仁義道德の感化力のどれだけ深いというのを証明するのであります(拍手)

そうして西洋文化、武力による文化の力がないということは即ち今日英国の武力をもってしても、尚英国の勢力である所の埃及と、又は亜刺比亜、又波斯の到る処においてこの独立運動、革命運動というのが起り、若し五年間英国の勢力が衰頹したならば、即ち総ての英国の属地というものが悉く独立運動を起して英国に反対するのであります、夫は即ち東洋文化と西洋文化との文化の何方の文化が良いかということを示すのである(拍手)

それでこの大亜細亜主義というのは何を中心としなくちやならぬかということ、即ち我東洋文明の仁義道德を基礎としなくてはならぬのである(拍手)勿論今日は我々も西洋文化を吸収しなくてはならぬ、西洋の文化を学ばなくてはならぬ、西洋の武力的文化を採り入れなければならぬけれども、我々が西洋文化に学ぶというは決して之を以て人に圧迫を加えるのでなく我々は単に正当防衛のために使うのである、歐洲の武力による文化を学んで非常に進んだのは即ち日本でありまして、今日日本の海軍力も陸軍力も自国の人により自国の技術により、製造力により海軍をも用い、又陸軍をも完全に運用し得たのである。

そうして又西の方におきましてモウーツ土耳其という国があります、これは歐洲戦争の時には独逸に加担して、そうして負けましてから殆ど歐洲各国に分割される境遇になったのであるが、彼等国民の努力奮闘によりまして、之を打破して全く完全なる独立を今日得たのである、即ちこの亜細亜の東において日本あり、又西においては土耳其あり、この二つの国は即ち亜細亜の一の防備であり、亜細亜の最も信頼すべき番兵である、又亜細亜の中部においては阿富汗ニスタンという国があり、又ネパールという国がある、この二つの国は矢張り強い武力を持って居る国である、これ等の国民は今日の戦闘的能力というのは非常に強いのである、将来波斯にしましても、又口羅にしましても、総て皆武力を養成し得る民族である、又我中国では今日段々国民が覚醒されまして、この四億の民衆を以てして将来歐羅巴の圧迫に対して矢張り非常に大なる反抗力を持つのである(拍手)=完=

訂正 前号王道の文化中「文化の謀叛」の著者をストータとしたのはストツダードの誤

(4) 我等の覚醒

そうしてこの亜細亜におきましては、我国に四億の人間が居り、又印度は三億万の人民を有し、亜細亜の西においても亦一億万の人民がある、南洋一帯において数千万の人間がある、日本においても数千万の人が居る、そうしてこの世界四分の一の人種を抱擁して居る亜細亜は全部仁義道德を以て連合提携して、この歐洲の亜細亜に対する圧迫に対抗するだけの武力、力というのが必ず出来るのである、即ち我々は宜しく我々の東洋の文化、この仁義道德を中心とする文化を本とし、我亜細亜民族団結の基礎にし、又この歐洲に対して我々が学んで来た所の武力による文化を以て歐羅巴の圧迫に対抗するに使うものである。(拍手)

欧米の人民は僅四分の一の四億の民衆でありまして、我亜細亜民族は十二億万あるのである、今日の事情は即ち欧米各国は四億の人間を以て、我十二億万の人民に対して圧迫をするのである、これは即ち正義人道に違反する行為である(拍手)今日欧羅巴におきましても、又亜米利加におきましても、総て彼等は非常に専横極まる力を揮って居るけれども、彼等の国においては、米国におきましても、英国におきましても、あらゆる欧米の国の中には依然として矢張り少数の人が、この仁義道徳を重んじなてはならぬということを知って居る人があるのである、そうして見るというと即ち段々彼等の中にも東洋の文明、即ち仁義道徳を中心とする文明を信ずるように段々なり得るのである。

(孫氏は之において『露国は歐洲文化の幣害を見て仁義道徳を重んじなければならぬと感じ、歐洲各国の政策と分裂する方針をとり、為に白哲人種の国より謀叛視せられて居る』と説き尚語をつづけて)

それで大亜細亜問題というのはどういう問題であるかということ、即ち此圧迫される多数の亜細亜民族が全力を尽して、この横暴なる圧迫に—我々を圧迫する諸種の民族に抵抗しなければならぬという問題である、今日のこの西洋文明の下にある国々というのは、単に少数の民族の力を以て、多数の亜細亜民族を圧迫するのみならず彼等の国家の力を以てして、彼等の自分の国内の人民に対しても依然として圧迫をするのである、故にこの亜細亜の我々の称する大亜細亜問題というのは即ち文化の問題でありまして、この仁義道徳を中心とする亜細亜文明の復興を図りまして、この文明の力を以て彼等のこの覇道を中心とする文化に抵抗するのである、この大亜細亜問題というのは我々のこの東洋文化の力を以て西洋の文化に抵抗するという、西洋文化に感化力を及ぼす問題である、米国の或学者の如き我々の亜細亜民族の覚醒というのは、西洋文化に対する謀叛であるという、我々は確に謀叛である、併しこの謀叛というのは、単に覇道を中心とする文化に対する謀叛でありまして、我々は仁義道徳を中心とする文明に対して、我々のこの覚醒は即ち文化を扶植する、文化を復興する運動である。(拍手喝采、了=昨日「完」とありしは誤り)

データ作成:2008.5 神戸大学附属図書館